場 (locus) と神の唯一性

——反異端教父エイレナイオスの修辞学及び哲学的反駁

津 田 謙 治

Das Problem des “locus” und Gottes Einheit:

Die rhetorischen und philosophischen Widerlegungen der Kirchenväter

Kenji Tsuda

In dem Aufsatz wird versucht, den undeutlichen Begriff „locus“ Irenäus von Lyon ausführlich zu untersuchen. Er benutzt den Begriff in seiner Widerlegung gegen Gnosis, z.B. Valentinian, Markion, dort wird es klar, dass es unmöglich außer *einem* Gott ist, ein oberstes göttliches Dasein zu halten, weil die Mehrzahl von Gott die unendlichen oder grösseren Plätze und Locus verlangt. Wenn es zwei Götter wie bei Markion gibt, ist es notwendig, mehrere und grössere Götter als sie zu sein, die sie von außen enthalten. Diese Polemik bizielt sich freilich auf die rhetorischen und philosophischen Gedanken in seiner Zeit. In der vorliegenden Forschung werden die Einflüsse auf das Gedanke des Kirchenvaters und auf die Formungen der späteren christlichen Lehre geprüft.

一 問題設定

紀元後二世紀の末期にアフリカのカルタゴで活躍した護教家教父テルトゥリアヌスは、二神論のような異端的教説を掲げるマルキオンに対し、次のような反駁をしている。仮にマルキオンの神が、創造神の造り出した地上的世界から、パウロの説く「第三の天」⁽¹⁾のような場所へと人間を救済しようとするのであれば、この神と天をも包み込む「場」のようなものが存在しなければならない。この「場」は、神をも内包し、永遠な存在を常に内包しているが故に、その存在自体もまた永遠なものであり、神よりも偉大な存在と見なされねばならなくなる。従って、マルキオンは結果的に二人の神よりも更に優れた（包括者的）存在を自ら認めざるを得ないとテルトゥリアヌスは批判するのである。

このような「場」の議論は、テルトゥリアヌスよりも四半世紀程前に、既にリヨンのエイレナイオスがグノーシス諸派⁽²⁾に対して行っていたものである⁽³⁾。しかし、一見すると、この論駁は諸刃の剣であり、この「場」の議論そのものが、翻ってエイレナイオスたちの神の唯一性を脅かすものになりかねない。神が「在る」という思考は、神が「何れかの場を占有する」議論と分離することが困難だからである。エイレナイオスの論駁は、敵対者の教説の何を切り崩す事に向けられていたのか。そして、異端的影響の強まるローマ帝国の中で、使徒的伝統を守るただ一つの教会における教義の形成に、どのような意義を持ち得たのかを考察してみたい⁽⁴⁾。

二 エイレナイオスの論駁「神の外界」

エイレナイオスは『異端反駁』第二巻の冒頭で、グノーシスとマルキオンの教説に対し、創造神よりも上方にあると考えられるヴァレンティノス派の「神的な存在（アイオン）」とその諸存在による「充溢（プレーローマ）」や、マルキオンの善の神を取り上げ、その構造上の論理的矛盾を指摘している。

彼にとつて、「神の外側に何か（他の神など）が存在する」という思考は、論理を迫る過程で、首尾一貫性を破綻させてしまう運命にある。仮に「至高の存在」をヴァレンティノス派のように「プレーローマ」と呼ぶとしても、その神の外部に「別の神（創造者）」や「地上的世界」があると考ええるならば、必然的に二つの結論に達する。

「従つて、仮に彼らの言うように、プレーローマの外側に何かが存在するとすれば……二つの可能性のみが問いに付され得る。即ち、その外側に存在するものが（プレーローマを）包括して、プレーローマは（それによつて）包括されている……可能性か、もしくはプレーローマも、プレーローマの外側に存在するものも、互いに無限に離れていて、分離しているか、である」⁽³⁾ (AH 2.1.3)。

一つ目の帰結点は、仮にプレーローマの「外側」があるならば、その外側の存在自体によつてプレーローマが包み込まれることになる、ということである。

「プレーローマは包括される。そうでなければ、プレーローマの外側ということにならないのだから。というのも、もしプレーローマの外側に何かがあるとすれば、彼らの言うように、プレーローマの外側にあるものの内側にプレーローマがあるのであつて、その場合、プレーローマと共に、第一の神も（その内側にあると）

理解されるのである」(AH 2.1.3)。

プレーローマの「内側」と「外側」という思考は、その「外部」によって包み込まれ、プレーローマをも内包する「より大きな」存在を想定せざるを得ない。従って、ヴァレンティノス派やマルキオンにおける「第一の神」も、その「外側にある存在」によって包み込まれてしまう。しかし、ここでいう「外側」が、創造神とそれが造り出した世界であるという事にはならない。つまり、創造神や地上的世界がプレーローマを包み込んでいるのではない。それらは、確かにプレーローマの外部にあるものであるが、ヴァレンティノス派の神話によれば、プレーローマよりも下位に位置するものと理解されている⁽⁶⁾、これらがプレーローマや第一の神をも包括するものではないであろう。この創造神とその世界に目を向ける場合、プレーローマの外側にありながら、同時にプレーローマを包括しない可能性が指摘されなければならない。

その可能性とその帰結点が、彼の二点目の仮説となろう。これはプレーローマが「外側に存在するもの」に包括されず、創造神もしくはその世界が全く別の位置に外在するという考え方である。しかしこの場合、結果的にはこれらの神的領域相互の「隙間」が要請されてしまうということになってしまう。

「(仮に両者が互いに離れているのであれば)そうするとプレーローマとその外部にあるものとの間に存在し、(両者の間に)無限の距離を生み出すような第三のものがあらねばならない。この第三のものが両者を内に含んで包括し、そうするとこれはプレーローマやプレーローマの外側にあるものよりも大きなものでなければならぬ。というのも、この第三のものはそれら両方を自らの内奥に含んでいるのだから」(AH 2.1.3)。

神的な領域が隔絶していれば(二人以上の神がいれば)、そこには「間」がなければならぬ。それは無限の距離であれ、紙一枚の隙間であつても同様である。この空隙をエイレナイオスは「第三のもの」と呼んで議論を組み立

ているが、結局は先の議論に等しく、それはプレローマの外部にあるが故に、外側から包み込み、同時にプレローマの外側にあつた創造神とその世界をも覆い尽くすものとなつてしまう。プレローマや神そのものに「外側」を設定する思考は、外側によって内包されるという帰結を避けられない。

「しかしそのようにして、包括されるものと包括するものとの話は無限に続いていくのである。というのも、この第三のものも、再びその上方に自らの始まりと下方に自らの終わりを持つのであれば、他のものによつて（その始まりと終わりを）限定され、その他のものもまた別のものによつて始めと終わりを持つからである。……こうしてこの議論は無限に移行する。従つて、彼らの思弁は決して唯一なる神を保持することはなく、そうではなくてせいぜいのところ、無の中に崩壊し、自らを真の神から引き離すのである」（AH 2.1.3）。

そしてこの（二人以上の神を包括する）「第三のもの」もまた「何か別のもの」によつて包括されているに違いなく、無限に包含する、されるの関係が拡大し、それと同時に真の神からも、また第一の神という自分自身の神からも、ヴァレンティノス派やマルキオン^①たちは遠ざかつてしまうのである。

結局のところ、神が包含しない部分、即ち神的領域の外部について語ることは、論理的な破綻に追い込まれざるを得ない。エイレナイオスはこの議論を用いて、論駁の矛先を異端者たちの創造論へと向け直す。

三 エイレナイオスの論駁「空虚からの世界の生成」

神に包括されない「外界」の議論を展開し、更にエイレナイオスは異端者たちの主張する「空虚」からの創造（生成）論を取り上げ、その誤謬を指摘する。仮に神の外側に「陰」とも呼ばれる「空虚」が存在していて、それを

「場」や「材料」として世界が生成されたと考えるのならば、そのような議論は全く保持できないものであるという。

「ヴァレンティノス派が語るピュトスやそのプレーローマ、そしてマルキオンの神は、（思弁として）不安定なものである。彼らが空虚とか陰とか呼ぶものが、その神の外側にあったのだと述べるとき、確かにそうであろう。というのも、この空虚が彼らのプレーローマよりも大きくなってしまふのだから。同様に不安定な（議論）は、プレーローマが自らの内側⁽⁸⁾にあらゆるものを内包し、（それにも拘わらず）何かそれとは別の者によって世界が造られたのだということである。そうであれば、霊的なプレーローマの内側に、そこで世界が形成するような空虚で形相を剝奪された何かを考えなければならなくなるからである」（AH 2.3.1）。

ヴァレンティノス派が「原初の父」と呼ぶ「ピュトス（深淵）」及びその神的存在による「プレーローマ（充溢）」が（もしくはこれに属さない「造物主（デミウルゴス）」が）、世界の形成に「空虚」を必要としたと考える限り、先の章で考察した「場」の議論と同じ論理的な破綻に逢着する。神の外側に「空虚」があれば、その空虚の方が神よりも大きく、偉大なものになってしまうからである。しかしながら、神の内側に「空虚」もしくは「陰」があったと捉えるのもまた困難である。空虚は形相を剝奪された、言わば質料的なものであり、このような非ロゴス的なものが霊的な充溢であるプレーローマの内部にあるということは、多くの疑問を引き起こすことになってしまう。霊的なプレーローマの内部に空虚が包括されるという議論は、神と空虚の關係に複数の曖昧な点を惹起させる。一つは、世界の生成以前に、神はこの空虚をどうしようとしていたのか、という点である。

「原初の父は、形相を持たないようなそれ（空虚）において未来に何が起こるかに関して、特に関心を持たないままであつたのか、それとも、その（存在を）知らなかったのだろうか。もしもこの神がそれ（空虚）を知

らなかったというのであれば、もはや全知なる神ではない。しかし、そうでない（神が空虚を知っていた）ならば、今度はどうしてこのような場（*locus*）に神がこれほどの（長い）間無関心でいたのかについて、彼らは説明が出来ないのである」（AH 2.3.1）。

彼が何故神が世界を創造するよりも以前に長い時があったと理解していたか⁽¹⁹⁾に関しては、解釈が困難である。いずれにしても、彼の異端者に対する批判の中心には、何故、空虚に神の摂理が働かなかった「時（間）」を推断する必要があるのか、という問題があったのだと考えられる。万物が神に内包され、空虚もまたその例外でないならば、その形相を剝奪された状態に対して、必ず神の御手が差し伸べられていなければならない。空虚が空虚のまま放置されるのは余りにも冷淡であり、不自然である。

更にウーシアの点でも、神と空虚との関係は曖昧である。世界の生成以前に空虚があったとすれば、それはいつから、そしてどこから「在った（在るようになった）」のであろうか。

「それでは、この空虚はどこからやって来たのであろう。それはこのように問われうる。空虚は全父と製作者によって生み出されたのか。そして、他のアイオーンたちと同格で、親類であり、恐らくは他のアイオーンよりも古いのか。もしもそれが父から流出したのであれば、空虚を流出した父と同じでなければならない……。もし空虚が（父から）流出したのでなければ、空虚は自ら生まれたのであり、自ら発出し、彼らの全父であるピュトスと時間的に同格である。そうすると、空虚は彼ら（グノーシス）の全父と同様の本質を持ち、同様の賞賛を得なければならない」（AH 2.4.1）。

仮に「原初の父」によってこの空虚が生み出されていたのであれば、「（プレローマで最も若い）ソフィア」や他のアイオーンたちのような神的性質と同種の存在となろう。他のアイオーンは父より流出した存在であって、そ

のウーシアは流出をした父と同質でなければならない。仮に空虚もまた流出したものであれば、父と同質でなければならないが、少なくとも空虚は靈的な存在ではないし、⁽¹⁾ 神的な性質も持ち得ない為、流出によって生み出されたものではない。他方、空虚が流出したのでないのであれば、それは自ら「自身」を發出した存在であり、これは原初の父に等しい（至高の）位置付けにあると考えざるを得ない。しかし、神的でない空虚が至高の存在というものも不自然である。空虚が父から流出したにせよ、そうでないにせよ、その存在を問題にするならば、いずれにしても空虚は原初の父と同質（同格）のものと捉えざるを得ない。従ってヴァレンティノス派が神として讃える父とは、詰まるところ形相を剝奪された空虚と同じものに過ぎないとエイレナイオスは論駁しているのである。

四 議論の整理と背景「外界、隙間、空虚」

先の章ではエイレナイオスにおける「外界」、「隙間」、そして「空虚」の議論の分析が試みられた。ここまで見てきた議論の中心にある用語は以下の通りである。

- a 「神の外側（外界）にあるもの」は「*extra eum*」(AH 2.1.2)「*quod extra est*」(AH 2.1.3)と表現され、神を外側から内包するものとして修辭的に用いられている。解釈の上では、これは「第一の神」とは別の神、すなわち「デミウルゴス」やそれが生み出した地上的世界であって、場合によっては、この「外側にあるもの」が「空虚」をも指し示していると考えてよい。
- b 「二つ以上の神の性質の『間』にあるもの（隙間）」はエイレナイオスによって「第三のもの（*tertium*）」(AH 2.1.3)⁽²⁾ と呼ばれた。複数の神的存在を別け隔てる空隙であるが、これは或るものと他のものとの「間」

であると同時に、それぞれの神的存在にとっては「外界」でもあり、これもまた「空虚」をも指す場合がある。

c 「空虚」とは「陰 (umbra)」（AH 2.3.1）“vacuitas”（AH 2.4.1）“locus”（AH 2.3.1）と呼ぶ⁽¹³⁾ともある。これは神が世界の創造の為に用いた「場」であり、万物はそこから生成した。後で考察するように、解釈の上ではこれを「質料」“materia”（AH 2.10.4）と同義と捉えても差し支えないであろう。

エイレナイオスの用語はもともとギリシア語で書かれたものを無名の訳者によってラテン語へと翻訳されたものである⁽¹⁴⁾ので、彼の用いた厳密な用語上の区別やテルトゥリアヌスの用語法との比較などは、翻訳技巧に関する詳細な研究を前提としない限り、説得力を持って分析することは困難であると言える。しかしながら、これらの議論には、一見するだけで、ある種哲学的な考察を含んでいることが認識される。ここでは議論の背景に関して若干の考察を試みてみたい。

a エイレナイオスらが「外界の議論」として、「神の外側に存在するものが無限にそれを包括するものを要請する」論法は、当時よく知られた修辞学のトポスの一つと見做される。シェーデルは『異端反駁』における哲学と修辞学の背景を分析し、二世紀前半に書かれたテオソンの『プロギュムナスマタ（予備練習）』とエイレナイオスの議論とを比較する。ここで彼は、多くの修辞学のトポスがエイレナイオスの議論の中で用いられていることを指摘している⁽¹⁵⁾。実際、あるものの外部に、より大きな優れたものを必要とする、この「外界」の議論は、「より小さなもの」が「より大きなもの」を前提とする“ek tou elatontos”⁽¹⁶⁾という修辞的技巧としてエイレナイオスが用いたものと類似点が多い。

b 二つの存在の間に「第三のもの」を無限に仮定していく議論は、プラトンの『パルメニデス』に類比され得

る。プラトンはここで、接触しようとする（二つ以上の）ものの中に「第三者」となるものの存在について触れている。⁽¹⁷⁾ 彼自身は「一」と「一以外のもの」との間の接点を巡ってこの「第三者」の議論を組み立てているのである。そこには「存在する何か」を包括し、またより大きな「第三者」によって包括されるような議論はない。エイレナイオスの「第三のもの」とプラトンの「第三者」とは、議論の文脈も用語自体も類似点が多いが、「第三のもの」に限界領域（始めと終わり）を設けて、無限に包括及び内包の関係性を見出すエイレナイオスの思考は『パルメニデス』によつてのみ汲み尽くされるものではないと言える。

c 他方、この「空虚」に関する議論は、原子論を説いたデモクリトスやエピキュロス派を想起させる。⁽¹⁸⁾ デモクリトスは万物のものはや分割できない状態を原子と呼び、その原子が運動するための空間のようなものを空虚（ケノン）と捉えた。万物の生成に神を要請しない無神論的ともいえる原子論の思考が、エイレナイオスの敵対者たちの教説の源流として流れていることは、グノーシスがキリストの教えではなくギリシアの哲学に遡源しうることを示すには格好の材料に成り得たであろう。⁽¹⁹⁾ しかし、直接の示唆は無くとも、万物がそこから生成したとされる彼の「空虚」の議論は、内実として、プラトンの『ティマイオス』における「場（コーラ）⁽²⁰⁾」と区別することが出来ない。実質的には、エイレナイオスの「空虚」論批判は、「製作者である神（デミウルゴス）がアイデアを原型として、あらゆる形像を受け入れるために底にあつた場に手を加えることによつて世界を作り上げる」というプラトンの生成論⁽¹⁾に対して異議を唱えようとしたとも言える。彼の時代における中期プラトン主義においては「場」を「形相無き質料」と捉え、「創造者」と「アイデア」と共に、三つのアルケーとしてプラトンが述べたと理解されていた。⁽²¹⁾ エイレナイオスはこのような生成論を全て否定したのではない。⁽²²⁾ 彼はプラトンの生成論における、「良き神が最良のものとして世界を造られたという創造観⁽²⁴⁾」と「その良き神による摂理」⁽²⁵⁾とを受容しようとしたが、他方で神と等しく永

遠なものとしての「空虚（場）」、もしくは「質料」を激しく非難した。彼が「空虚」と呼んだその「質料」は、神の外部に存在することからも、また神と同様に永遠であるということからも、神の「唯一性」を脅かすからである。

五 議論の展開 (a) 「三位一体論」 (b) 「無からの創造」

既に見たように、エイレナイオスやテルトゥリアヌスの用いた「外界」「空隙」「空虚」の議論——これらを纏めて仮に「場」の議論と呼ぶ——は、ヴァレンティノス派やマルキオンなどの敵対者の説く二神論もしくは多神論を、切り崩すためのものである。

「彼ら（ヴァレンティノス派）によれば、彼らが先在や原初と呼ぶ万物の父、そのプレーローマ、そしてマルキオンの善なる神は、そこに包括され、その父よりも大きな存在に違いないある他の力によって、外側から取り囲まれるのである。というのも包括するものは、包括されるものよりも大きいし、しかしより大きく、強く、力強いものは恐らく神であろうからである」(AHz.1.2)。

エイレナイオスは「場」の議論によって、例えばヴァレンティノス派の「三〇」というアイオーン（神的性質）の数やマルキオンの「二」という神の数を不安定なものにする。「二」以外の、「三〇」や「二」という数字は、その「外部」と「隙間」によって、無限に多くの数字に膨れ上がるからである。

それと同時に、彼は敵対者の説く「第一の神」を「至高」の座から引き摺り下ろす。「第一の神」を外側から包括する、より大きな存在を説くこと、もしくはこの「第一の神」に比肩する存在を説くことによって、この神はもは

や「最も偉大な者」ではなくなるからである。

この「場」の議論は、エイレナイオスの属する使徒的伝統を保持する教会において、様々な方向性への展開に寄与したものと考えられる。恐らく十分な確実性を持つて言えることは、彼の「三位一体」論と「無からの創造」論が「場」の議論と密接に結びついている点である。

(a) エイレナイオスは「場」の議論を論じた『異端反駁』第二巻の巻末において「三位一体」論の原型とも呼ぶべき議論を展開している。彼にとつて、創造神である「父」はその「子」である「言葉」と、「霊」である「知恵」を用いて万物を造り出したとされる。

「ただ父のみがあらゆるものを創造し、見えるものも見えないものも、……天のものもこの世のものも、御自分の力ある言葉と御自分の知恵によつて全てのものを結びつけ、秩序付けたのである……」(MH 2.30.9)。

創造神は世界の生成に際し如何なる他の助力も材料に頼ることもなく、自らに内在する「言葉」と「知恵」を用いたとエイレナイオスは理解した。これらが神に内在するのは、「場」の議論を展開した彼にとつては既に明確なものである。「言葉」と「知恵」が神の外部に「在った」と捉えるならば、「外界」と「第三のもの」によつて、神の「唯一性」は多神論的世界観の中で崩壊してしまうからである。このことは、既に旧約聖書で明示されていたこれらの諸概念(「言葉」と「知恵」)を、「神の子」と「神の霊」として理解しただけではない。その内在的位置付けを明確にすることで、異端者たちの多神論的思考に対峙したのである。彼のこのような解釈は、テルトゥリアヌスや後代の「三位一体論」の形成に、密接に関連していることは明白であらう。

(b) 「無からの創造」とは、ユスティノスの弟子であるタティアノスの中に、その思考の萌芽を見いだすことのできる教理であつて、神が「無(何でもないもの、もしくは取るに足らないもの)」から万物を創造したと理解す

る。特にタティアノスやテオフィロスなどは、神が最初に「無」から「質料」を生み出し、次にその「質料」から「万物」を作り出すという二段階の順序を明確に述べている。エイレナイオスはその『異端反駁』第二巻において「空虚からの創造」を論駁したことを我々は既に確認したが、同じ第二巻の記述の直後に、この「場」の議論が「質料からの創造」の論駁へと接続していることは、彼にとつて「空虚からの創造」の否定が「無からの創造」の教理の正統性を示す事への布石となっていたと捉えられ得る。

「人間は無から何かを創ることはできず、既に存在している質料からしか造れないからである。これに対して神は、それまで存在しなかった質料を、創造の際に自分で創り出すという点において、人間を遙かに凌駕しているのである」(AH 2.10.4)。

ここでエイレナイオスが批判的に述べている「既に存在している質料」とは、特にヴァレンティノス派やマルキオン、そして中期プラトン主義などにおける、創造者が世界の生成の際に用いた「永遠なものとしての質料」を含意していることは間違いない。エイレナイオスはこのような質料から不成性、即ち永遠性を剝奪し、神のみが永遠なものであると理解しようとする。神の他には「何も無かった」のであり、神の「外界」や「内在する質料」を否定し、「空虚」から世界を生成することを拒否する「場」の議論は、このような「無からの創造」論を補強していると(32)言える。

六 結論

最後に、エイレナイオスが「場」の議論によって明確にしようとした方向性を確認したい。彼は、この議論を展

開する冒頭で、創造者である神について以下のように叙述している。

「それでは最初の、最も大事なものとして、自らの内部にある天と地と万物とを造り出した創造者である神のことから記述し始めることが我々にとって最良のことであろう。……この方の上にも後にも何ものも存在せず、この方は他の誰にも動かされることなく、自らの意志で、自由に万物を造り、それ故にこの方が唯一の神であり、唯一の主であり、唯一の造り主であり、唯一の父であり、万物を包括する唯一の者であることが示されるべきである」(Mt 2:11)。⁽³⁹⁾

エイレナイオスにとって「唯一の神」であり「唯一の造り主」とは、あらゆる「外側」や「外在」を否定し尽くしたところに顕現するのであって、単に「二」や「多」が「一」を意味しないから、という理由に拠るのではない。万物を有らしめる唯一の創造者の力は、「空虚」や「質料」を否定する「場」の議論を経て、一切の「無」の内に純粹に働くのである。

註

(1) II コリント 12・2。マルキオンは自らが認める唯一の使徒であるパウロの記述から、善の神と第三の天とを結びつけている。「この人間のためにお前の主(マルキオンの神)は第三の天から卑しい要素の中へと降って来たのである、この人間のためにこの創造者の牢獄の中でお前の主は十字架に架かったのである」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』I 一四・二)。

(2) 特にこの批判は、彼の『異端反駁』第一巻の冒頭で展開されるヴァレンティヌス派の弟子たちのグループ(プロレマイオス派として捉えられてきたもの)に向けられている。そこでは後で触れるように、「深淵(ビュトス)」と呼ばれる父から、三〇もの神的存在(アイオーン)が流出し、それらの諸存在の充溢を「プレーローマ」と呼ぶ。

- (3) E. P. Meijering, *Tertullian contra Marcion: Gotteslehre in der Polemik Adversus Marcionem I-II*, Leiden, 1977, S.47-49.
- (4) 拙論の先行研究として、シェーデルやグラント、そしてメイイエリントらが、紀元後二世紀の修辭学や哲学との関係からこの「場」の議論に触れている。テキストそのものの分析に関しては、ルソーによる注釈と、最近オスボーンが纏めたものがある。しかし、正面からこの議題に取り組んだ先行研究は未だ少ないと言えるであろう。Robert M. Grant, "Irenaeus and Hellenistic Culture", in: *HTHR*, 42, Cambridge, 1949, pp.41-51; William R. Schoedel, "Philosophy and Rhetoric in the Adversus Haereses of Irenaeus", in: *VigChr*, 13, Leiden, 1959, pp.22-32; E. P. Meijering, "Irenäus zum zeitlichen Anfang der Welt", in: *VigChr*, 54, Leiden, 2000, S.1-11; Irenée de Lyon, *Contre les Hérésies Livre II, Tome I*, A. Rousseau(ed.), SC, 293, Paris, 1982; Eric Osborn, *Irenaeus of Lyons*, New York, 2001. 尚、本論考における文献の略号は、*TRE* (Theologische Realenzyklopädie) の表記に準拠する。
- (5) エイレナイオスはギリシア語で本書を記述したが、それは現在ほんの僅かな断片が、エピファニオスの『パナリオン』に収録されているのみである。本引用その他多くは、無名の訳者によって、ギリシア語からラテン語へと翻訳されたものである。本発表で用いるテキストはルソーによる仏語対訳版とブロックスによる独語対訳版の以下の二つ。
Irenée de Lyon, *Contre les Hérésies Livre I-II*, A. Rousseau (ed.), SC., Paris, 1952-1982; Irenäus von Lyon, *Adversus Haereses I-II*, Fontes Christiani, Freiburg, 1993-2001. 本稿では *AH* と略す。
- (6) 例えば『異端反駁』第一巻冒頭にあるいわゆるプトレマイオス派の教説では、ソフィアの過失によってプレローマの外部に脱ぎ捨てられたものが創造者であるデミウルゴスと地上的世界の原型的存在である。これらは心魂的、質料的なものとして、霊的なプレローマよりも下位であると理解される (*AH* I.1-8)。
- (7) ここでは主としてヴァレンティノス派に対して批判の目が向けられていたが、エイレナイオスは次節に続いてマルキオン派に関しても同様の批判を行っている。「マルキオン派に対する反論が、この批判に類比される。というのも、マルキオンの二神は、二神の間の無限の空間によって包括され、取り囲まれているに違いなく、その空間は、二神を

互いに分離させているのである。従って、彼らは、互いに始まりと終わりに関して互いに無限の距離を隔てるような多くの神々を多方面に想定しなければならないのである」(AH2.1.4)。

- (8) ラテン語訳では“infra”フロックスはこれをラテン語翻訳者がギリシア語の“entos”を訳したものであるとし、“innerhalb”と訳するのが正しいとしている。実際、そのように訳さないと、後ろの文章とは繋がらず、ルソーも同様に“a l'interieur de”と訳している。

- (9) 「質料」に関する議論は、同じ第二巻の中(AH2.10.4)で、類似した仕方で行われている。

- (10) メイイエリングによれば、エイレナイオス自身は、「時間」という概念が、「世界の創造」と共に発生したものであると捉えていた。ここにはまだアウグスティヌスのような明確な「時間論」は形成されておらず、引用文の解釈は難しい。cf. Meijering (2000), S.3-5.

- (11) 『異端反駁』第一巻で論駁されるヴァレンティノス派の神話の中では、霊的な存在とは「神的存在(アイオーン)」と「人間」の内部にあるのみであり、「空虚」や「陰」が霊的な存在として捉える事は困難である。

- (12) これをテルトゥリアヌスは“locus”という言葉で表している(『マルキオン反駁』I.1.1.3)。

- (13) テルトゥリアヌスは、これを“aliquid spati”と表現することがある(『マルキオン反駁』I.1.1.3)。

- (14) *St. Irenaeus of Lyons, Against the Heresies book I*, Burghardt (ed.), ACW, 55, New Jersey, 1992, pp.11-15. 尚、ブルクハルトらによれば、このエイレナイオスのギリシア語原本をラテン語に翻訳したのが他ならぬテルトゥリアヌスであったという学説も一時期在ったようであるが、明らかに文体が異なることや、基本となる重要語(例えば「御言葉」「知恵」「ピュトス」など)の相違などからも、受け入れられない。

- (15) Schoedel (1959), p.30.

- (16) *Aelius Theon, Progymsmata*, Les Belles Lettres, Paris, 1997, p.85. テオンの議論そのものが、ペリパトス学派(これに関連して、アリストテレス『自然学』211a-212aを挙げられよう)の影響を強く受けており、批判的な部分を含んでい

たとしても、そこにはプラトンの議論との類似点が多々あると言える。

(17) プラトン『パルメニデス』一四九E。

(18) 『万有の自然本性は物体と空虚である』(ルクレティウス『自然について』第一巻、参照)。

(19) この論駁のロジックは、エイレナイオス、テルトゥリアヌス、そしてヒッポリュトスなどにも共通するものである。彼らにとつて、あらゆる異端は哲学によって「唆された」(テルトゥリアヌス『異端者への抗弁』七・一・六―七)のであって、神の福音からは逸脱している。

(20) プラトン『ティマイオス』五二A―D。

(21) 勿論、プラトンの『ティマイオス』の中で、これ程明確に「生成論」が論じられているとはいえない。実際にはこのような解釈が行われるのは、中期プラトン主義に入ってからである。

(22) 例えば、アルキノス『プラトン哲学綱要』一六二・二九―三九。アプレイウス『プラトンの教説』一・五など。但し、プラトン自身は、三原理説を明確に説いていたわけではない。

(23) エイレナイオスの哲学全般に対する立場は、否定的なものが根底にあるとしても、一枚岩ではない。特にプラトンに関しては、グノーシスに比べれば遙かに神に対して敬虔であると考えていた(エイレナイオス『異端反駁』III二五・五)。だが、エイレナイオス自身がプラトンの著作を丹念に読んだ形跡は無く(例えば中期プラトン主義の三原理説をプラトンが直接述べたものと誤解している)、恐らく教会周辺にあったドクソグラフィ(哲学諸説の概説書)を参照したのであろう。cf. Van Unnik (1976), p.203. エイレナイオスの立場は、グラントが正しく指摘しているように、哲学者というよりは修辭学者であつて、論戦の為に哲学を利用しているに過ぎない。Grant (1949), p.47.

(24) プラトン『ティマイオス』二九E―三〇A。

(25) メイイエリングはこの点を重視し、エイレナイオスが中期プラトン主義における生成論とキリスト教教義の類似性を説いていたと捉える。彼は中期プラトン主義者アッティコスが世界に「時間的な始まり」を持つという思考をエ

レナイオスが受容したと捉え、両者の近似性を説く。しかしながら、メイイエリングが述べているように、中期プラトン主義において世界が「時間的な始まり」を持つと解釈することは稀である。Meijering (2000), S.35. アルキノスなどは、明確に「世界がまだ存在しない時があったかのような意味で考えてはならない」(『プラトン哲学綱要』169, 32-4)と述べる。オズボーンも同様の見解を示し、プラトンが神を義や善であり、全能であると捉えていたことは、グノーシスの誤謬を正すことに寄与していたと指摘する。Osborn (2001), p.72.

- (26) エイレナイオスは『異端反駁』の第三巻に入ると、明確に「子」及び「霊」という概念を用いている。尚、「父子―霊」「創造者―言葉―知恵」に関する捉え方の並行箇所は、彼の『使徒たちの使信の表明』一〇にも見られる。

cf. Jacques Fanino, *La Théologie d'Irénée: Lecture des Ecritures en réponse à l'exégèse gnostique. Une approche trinitaire*, Paris, 1994, pp.283f.; Osborn (2001), pp.89-93.

- (27) AH 2.2.3. cf. Osborn (2001), pp.52-53.

- (28) 『使徒たちの使信の説明』一〇では、「言葉」と「知恵」がケルビムとセラフィムと呼ばれるとエイレナイオスは述べている。

- (29) 詩編三三・四一六、箴言八・二二―二四。

- (30) タティアノス『ギリシア人への教説』七。後にテオフィロスが「無からの創造」の議論を展開した。cf. Gerhard May, *Schöpfung aus dem Nichts: Die Entstehung der Lehre von der creatio ex nihilo*, Berlin, 1978, S.159-167; Joseph Torchia, *Theories of Creation in the Second Century Apologists and their Middle Platonic Background*, in: StPatr.26, Berlin, 1993, p.195.
- (31) 勿論「」の二段階の順序(“creatio prima” “creatio secunda”)という捉え方は近代的な理解であって、彼らが「二段階の創造」の教理を掲げていたわけではない。有賀鐵太郎『無と創造』(有賀鐵太郎著作集4)創文社、一九八一年、一三九頁参照。

- (32) エイレナイオスに共通する神が「一」とあるという思考は、神が「多」ではなく、神が「他」を持たないという議

論が展開した結果として捉えられねばならない。神を包括する「外界」や、他なる神との「空隙」、そして神に等しい多なる存在を表すものとしての「空虚」を否定する「場」の議論の彼岸に、初めてエイレナイオスの「唯一なる者」は現前するのである。神の外部を「始まり」と「終わり」によって限定するものや、「空虚」や「質料」のように神に外在する一切の「有るもの」を否定したところで「無からの創造」も捉えるべきである。「無」は単に「何も無かった」のではなく、「有るものの否定」であり、その「否定の極まる」ところに、無限なるもの、一切の把握を超えたものの力が働く」（有賀（一九八二）、二八一頁）と考えなければならない。

(33) エイレナイオスと同様の「場の議論」を展開したテルトゥリアヌスも、包括的な創造神のみを神と見做している。「従って、創造者は神である。万物は彼に属し、彼の外側には何もないのであるから。同様に、この他の者は神ではない。万物が彼自身には属さず、その外側にあるのだから。実際、世界が創造者に属する限り、他の神の「場」は私には見えない。全てのものはその作り手によって占有されているのである。もし他の神的性質のために何らかの余地が被造物の間に空いているとしても、明らかにそれは誤った神的性質の為に空いているのであろう」（テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』一・一一・二—三）。